

毛の指環

宮本百合子

青空文庫

その家は夏だけ開いた^あ。

冬から春へかけて永い間、そこは北の田舎で特別その数カ月は歩調遅く過ぎるのだが、家は裏も表も雨戸を閉めきりだ。屋根に突出した煙の出ぬ細い黒い煙突を打って初冬の霰^{あられ}が降る。積った正月の雪が、竹藪の竹を重くこたえて崩れ落ちる。その音を聴く者も閉めた家の中にはいない。煤で光る檜^{たるき}の下に大きな炉^{いろり}が一つ切つてあつて、その炉の灰ばかりが、閉め切つた雨戸の節穴からさし込む日光の温みにつれ、秋の末らしく湿り、また春の始めらしく軽く乾く。——微かな生きものだ。

侘しい古い家も、七月になると一時に雨戸という雨戸を野外に

向つて打ち開き甦つた。東京から、その家の持ち主の妻や子供達や、従兄従妹などという活発な眷属けんぞくがなだれ込んで来て部屋部屋を満した。永い眠りから醒まされて、夏の朝夕一しお黒い柱の艶を増すような家の間で、華やかな食慾の競技会がある。稚い恋も行われる。色彩ある生活の背景として、棚の葡萄ぶどうは大きな美しい葉を房々と縁側近くまで垂らして涼風に揺れた。真夏の夕立の後の虹、これは生活の虹と云いたい光景だ。

由子は、独りで奥の広間にいた。開け放した縁側から、遠くの山々や、山々の上の空の雲が輝いているのまで一瞬ひとめに眺められた。静かな、闊ひろやかな、充実した自然がかっちり日本的な木枠はに嵌められて由子の前にある。全く、杉森をのせ、カーバイト会社の屋

根の一部を見せ、遠く遠くとひろがる田舎の風景は、手近いところで一本、ぐつと廊下の角柱で画される為、却つて奥ゆきと魅力とを増しているようだ。

由子は、樟くすのきの角机に肱をつき目前の景色に眺め入っていた。樟は香高い木だ。その芳ばしきは如何にも八月の高燥な暑さやよどぬみなき日の光と釣り合つて、隈なき落付きというような感情を彼女に抱かせる。

——そうやっていると、彼方の庭までずっと細長く見徹せるやや薄暗い廊下をお清さんがやつて来た。白地の浴衣にたすき襷がけの甲斐甲斐しさだ。彼女は由子の傍へ来ると、

「ちよつと、こんなもの」

と云つて膝をつきながら、笑つて両手の間に小さい紫のメリンスの布きれをひろげて見せた。

「何なの」

「あなたのでしよう」

「あら？　前かけね」

「長持ちのお布団の間から出たんですよ」

由子は漠然と懐しささえ感じて、そのメリンスの小つぽけな前掛に触つて見た。前掛と云つても、袷の膝をよごさない為ほんの膝被いのつもり故、紫の布は僅か一尺余りの丈しかなかった。もう虫が喰つていた。ぽつぽつ小さい穴や大きな穴の出来たその古前掛は、並はずれて丈がつまっているだけどこやらあどけない愛

嬌さえある。

「あら感心にまだこの紐がちゃんとしている」由子は一種の愛惜を面に表して、藤紫の組紐をしごいたりしたが、やがて丁寧にそれを畳んで、お清さんの前へ置いた。

「あなた大働きだから、勲章にこれさし上げます」

「おやまあ」

お清さんは、笑いながらそれを戴いた。

「恐れ入ります。じゃ、いただきます」といって家宝にでも致しましょう」真面目腐って立ち上ったが、座敷を出ながら、

「でも本当に可愛いんですね、しまつときますよ」

ただ虫が喰っただけだとは思ったが、由子はそのまま黙ってい

た。

その紫の小さい前掛に特別な連想や思い出がある訳ではなかつた。ただ、平常前掛ふだんをしない由子が、何年前、気まぐれに捲えた紫前掛、その色の古風なところも、そのまま偶然虫に喰われながら出て来て見ると憎らしい心持もしない。ホホウ！　そして何だか微笑まれる。紫の布きれツ端ぼしとばかり感じられない親密さがあるのであった。

宏やかな自然の風景を写している由子の意識の上に暫く紫の前掛が鄙ひなびた形でひらひらした。段々その幻影がぼやけ、紐だけはつきり由子の心に遺つた。紐は帯留めのお下りであつた。あの帯留は母が買って来た。「まあこんな廉やすいものがあるんだね」そう

云つて由子の前へ出して見せた。「するのならあげよう」由子が
平常にしめているうちに、真中に嵌はまっていた練物の珠みたいなも
のが落つこちてしまった。珠みたいなものは薄紅色をしていた。

……

由子は、今も鮮やかにぼっくり珠の落ちた後の台の形を目に泛
べることが出来た。楕円形の珠なりにぎざぎざした台の手が出て
いるのが、急に支える何も無くなった。それでもぎざぎざは
頑固にぎざぎざしている。掴んでいるのは空くうだ。空っぽの囲りで、
堅い金具が猶もそのような恰好をしているのを見るのは厭な気持
であつた。

それで自分は前かけの紐にってしまったのだ。

ふつと、由子は心の隅に、更にもう一つの紅い玉を思い泛べた。帯留の練物のような薄紅色ではない。その玉は所謂紅玉色^{ルビー}で、硝子で薔薇^{ローズ}カットが施こされていて、直径五分ばかりのものだ。紅玉色の硝子は、濃い黒い束ね髪の上にあつた。髪の下に、生え際のすんなりした低い額と、心持受け口の唇とがある。納戸の着物を着た肩があつて、そこには肩あげがある。

目で見える現在の景色と断れ^き断れ^ぎな過去の印象のジグザグが、すーっとレンズが過去に向つて縮むにつれ、由子の心の中で統一した。

*

由子はお千代ちゃんという友達を持っていた。由子の唯一の仲

よしであった。由子が小学校の六年の時、お千代ちゃんは五年で、仲よしになったのはどんな動機からであったか、由子はもう思い出せない。六年と五年の女生徒が連合で四組舞踏クワドリールを踊った。先生も無心、生徒も無心、少し退屈を感じながら藤の花の散る下で、オルガンに合わせ、

イチニニサンシ
 一 二 三 四、五 六 七 八

イチトニトサンおチクトシチトハチト

一 二 三 四、五 六 七 八

先生は男で、白しろちぢみ縮シヤツの襯衣だ。そのような伸びたり縮んだり輪になる間に、お千代ちゃんと親しくなったのか。

由子はお千代ちゃんと一緒にかえる為に、女学校が退けると小学校まで廻った。お千代ちゃんが当番で、二人並び東片町の大通

りを来ると、冬など、もう街燈が灯っていることもあった。

*

由子とお千代ちゃんは歌をうたった。

阿蘇の山里秋更けて

眺め淋しき冬まぐれ

………

お千代ちゃんは内気らしく、受け口を少しあいて、低い声で歌った。由子は自分の肩をお千代ちゃんの肩にぴったりつけ、顔を上に向け、恍惚と声張り上げてうたった。

お千代ちゃんは、地味な白緋の紡績の着物に海老茶袴をつけている。

小学校を最優等でお千代ちゃんは卒業し、日比谷公園へ行つて市長の褒美ほうびを貰つた。その時、お千代ちゃんはやつぱり地味な紡績の元禄を着て海老茶袴をつけて出た。新聞が、それを質素でよいと褒ほめた。由子は、そうは思わなかつた。いい着物をお千代ちゃんに着せたかつた。あつて着ないのではない。お千代ちゃんの家は貧しいのを、由子は知つていた。

お千代ちゃんが、由子の家から三町もない処へ越して来た。家じゆう引越して来たのではなく、お千代ちゃんだけ、お祖母さんのところへ来たのであつた。いきなり木戸で、入ると花が一杯縁側まで咲きこぼれていた。縁側から油障子のはまった水口が見え、その障子が開いていると、裏の生垣、その彼方の往来、そのまた

先の×伯爵の邸の櫛の幹まで三四本は見られる。

*

お祖母さんの家はそのような家なのであつた。二階があつた。そこに叔父さんがいた。その人は絵描きであつた。

お千代ちゃんは、由子の入つた女学校の試験を受ける積りであつた。由子はどうかして入つて欲しいと思つた。女学校をずっと二人で通えたら、それは素晴らしいことだ。由子は勿論お千代ちゃんたやすは容易く試験を通るとその学力を信頼していた。そうでもなければ、市長からわざわざ御褒美を貰い、新聞で紡績なひの装を褒められたとて何になろう。

然し、お千代ちゃんを助けるつもりで、由子は自分の家で、一

つ机でお千代ちゃんと一緒に勉強した。書き取りを読んだ。母に頼んでお千代ちゃんの為に歴史や地理の問題を出して貰った。

*

試験の日、由子はお千代ちゃんを試験場の、青い小さい席のところまで送って行った。

「勿論大丈夫だけれど、確しつかりね」

お千代ちゃんは、受け口の唇に笑を浮かべながら合点をした。昼になった時、由子はパンを買って来て、二人で食べた。そこは花壇の隅の狭い芝生の上であつた。ニコライの鐘楼と丸屋根が美しく冬日に輝いて、霜どけの花壇では薬草サフランと書いた立札だけが何にも生えていない泥の上にあつた。由子はうっとり——思

いつめたような恍惚さで日向ぼっこをした。お千代ちゃんは眩し
そうに日向に背を向け、受け口を少しばかり開け、煉瓦の間まで
押しよせてその上に這い上ろうとしている芝の根を眺めていた。

実に思いがけずお千代ちゃんは試験に通らなかつた。

*

学校から帰ると、由子は出かけて行ってお千代ちゃんを呼び、
大抵自分の方へつれて来た。一つ机で、由子は方丈記を写した。
向い側でお千代ちゃんが木炭紙へ墨で幾枚も絵を描いた。女の絵
であった。

「——お千代ちゃん絵うまいのね」

「そーお。——私絵やろうかしら」

由子は頭をふり上げ、

「いいわ、そりやいいわ」

と熱心に賛成した。

「お千代ちゃん絵はきつといいわ、お遣^やんなさい、ね？　する？　きつとする？」

*

けれどもお千代ちゃんは絵もやらず、そのうち、祖母さんの家からいなくなつた。木戸を入れて行つて由子は訊いた。

「お千代ちゃんどこへ行つたの」

「神戸のおばさんのところへ行つたんですよ」

「いつ帰るの？」

「もう半月ばかりで帰りますよ」

「神戸のどこななの？」

「……ああ、由子さん、そのコスモスお持ちなさい、今剪^きつてあげましょうね」

お祖母さんという人は、親切な人であつたがそういう風な返事をした。

再びお千代ちゃん顔を見た時、由子は「ひどいわ、黙つて行つちやうなんて！」と云つた。

「御免なさいね。——あのね——誰にも云わないでね……私本当は神戸で小母さんなんかのところにいたんじやないのよ。嘉久子のところにいたの、手伝いしながら見習いしていたの。——何にも、まだ教えてくれないけれど……」

「——女優になるの？」

お千代ちゃんは黙って頸を下げた。その時、由子は、紅玉色ルビーの、硝子の、薔薇カットの施ローズこされた簪かんざしをお千代ちゃんのたつぷりした束ね髪たづねかみの横に見たのであった。

是非お千代ちゃんは神戸へ行かなければならなかった。由子は自分の髪かみの毛で、小さい三つ組みつぐみを拵こしらえ、指環ゆびわのような形にし、饒にぎは別にそれをお千代ちゃんにやった。

二三年後お千代ちゃんに再び会った時、彼女は銀杏いちようがえしに結った芸者であつた。――

稚かつた自分に全然解らなかつた生活の力が、お千代ちゃんを動かしていたことを理解し、由子は、高燥な夏の真昼の樟の香が鼻にしみるような心持になつた。

由子は遠く山巔さんてんに湧き出した白雲を見ながら、静かに心の中で愛する紅玉色の硝子玉を撫で廻した。

後記

この一篇を書き終つた時、私の胸は別れて久しいお千代ちゃんつたなの懐かしさで一杯であつた。我が小さく拙い毛の指環よ。

ひろい世の中へ出て行って、どこかで、どのようにか、彼女の生活を送っているだろうお千代ちゃんにめぐり遇え。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第三卷」新日本出版社

1979（昭和54）年3月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第5刷発行

親本：「宮本百合子全集 第三卷」河出書房

1952（昭和27）年2月発行

初出：「若草」

1927（昭和2）年12月号

入力：柴田卓治

校正：米田進

2002年9月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

毛の指環

宮本百合子

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>